ロシアによる ウクライナ侵攻に思う

旭川市医師会
JA北海道厚生連旭川厚生病院
赤羽（あかばね）　弘充（ひろみつ）

今、世の中で起きている最悪の時事問題は「ロシアによるウクライナ侵攻」だろう。この文章を書いている2022年４月初旬時点で、解決の光明はまだ見えていない。

2022年２月24日に始まったロシアの武力による現状変更の暴挙は、いかなる理由をつけようと許されることではない。北京オリンピックが閉幕し、北京パラリンピック開催直前というタイミングでの侵攻である。ロシアは2008年８月北京オリンピックの開会式の日にジョージア（グルジア）に侵攻し、2014年３月にもソチオリンピック開幕直後にクリミア半島（ウクライナ）を併合している。

思い起こせば（と言っても私を含めた多くの日本人が実体験として記憶されていることではないが）、ロシアは旧ソ連時代、日本が【ポツダム宣言】を受諾し無条件降伏した1945年８月14日以降もカムチャツカ半島、シュムシュ島へ侵攻し、8/23【日ソ両軍現地停戦協定】締結後も、ソ連軍に武器を引き渡した日本に対し更なる南下を続け、8/28択捉島、8/31ウルップ島の占領、9/1国後島・色丹島、9/3歯舞群島へと上陸、占領したという忌まわしい過去を持つ国である。9/2に東京湾上のアメリカ戦艦『ミズーリ』の甲板で行われた【降伏文書の調印式】にはソ連代表も参加していたのに、である。

1941年、日本はソ連との間に【日ソ中立条約】を批准している。有効期間５年間の相互不可侵条約である。ソ連は日本劣勢と見るや、この条約を一方的に破棄して上記の如く北方領土に侵攻し、【日ソ両軍現地停戦協定】締結後も軍を南へと進め、【降伏文書の調印式】に参加していながら、その後北方四島に上陸するという紳士協定の通用しない国であった。少なくともそういう歴史を持つ国であった。ロシアという国を誹謗中傷するつもりはないが、条約の存在も進軍や占領の経過も歴史的事実である。今般行われている【ウクライナとの停戦協定】も締結されたとしても、約束が誠実に履行されるか疑念を抱かざるを得ない。

旧ソ連やロシアという国の為してきた暴挙が「国民性による」とは思いたくはない。当時の日本にも言えることではあるが、時の指導者がさまざまな手段で情報を統制し、国民を騙した結果であり、多くのロシア人には正しい心があり、戦争や他国への武力侵攻を迎合していないと信じたい。だとしても、現政権の大統領を選挙で選んだのは「現国民」であり、国のあり方を変えることができるのもその国の国民である。プロパガンダを妄信させられる国民の不幸とも言える。

「権力は腐敗する、絶対的権力は絶対に腐敗する」とはイギリスの歴史家アクトン卿の言葉である。そういえば、日本でも長期政権を担った安倍内閣では「モリ・カケ・さくら」や、道警の「ヤジ排除」など腐敗のにおいがプンプンするような事態が多くの公僕の忖度のもと、平然と行われてきたことは忘れてはならないだろう。腐敗を断罪できない現在の日本にも危機感を覚えるのは私だけだろうか。

戦禍により廃墟と化したウクライナの街からは、惨殺されたとみられる市民の夥しい数の死体が発見されている。それをウクライナによる「挑発・偽装（フェイク）」であると喧伝し、ロシア国民の大統領支持率は更に上昇しているという。情報戦の様相を呈する近代戦争の闇がうかがえる。

ロシアとベラルーシはパラリンピックに参加させてもらえなかった事実を真摯に受け止めるべきで、開会式でのパラリンピック会長の「戦争と平和」に言及した音声と手話通訳を停止した主催国中国にも危うさと不安を禁じ得ない。そして北京オリンピックのフィギュアスケートで活躍した「妖精のような」ロシアの女子選手が、人間性を否定されないで活躍を続けることができるような国になることを願ってやまない。

日本医師会は世界医師会に対してウクライナの医療支援のため１億円の寄附をすでに行っている。日本医師会のホームページによれば、「タスクフォース・ウクライナ医療支援活動」や個人による支援募金活動も展開している。450万人とも言われる避難民に対して、政府専用機で20名の避難民を受け入れたという焼け石に水のような援助に比べれば格段実効的な支援だと思われる。

また、日本医師会は各地の医師会と連名で『ロシアによるウクライナへの軍事侵攻に対する緊急声明』を発出し、「恒久の平和と自由を願う世界の秩序を踏みにじるものであり、決して認めることはできない」「医療の中立性と人権は絶対に尊重されなければならない」と表明している。

ロシアの為政者に世界中からの非難の声が届くことを祈るばかりであるが、ロシア兵ひいてはロシア国民の良心に訴える手段があれば、最も有効な停戦への道筋になるように思われる。